

### 世界連邦日本国会委員会が総会を開催

— 現・元総理、各党代表・幹部が役員に揃い踏み —

世界連邦日本国会委員会は2025年度総会を3月6日午前10時より衆議院第一議員会館国際会議室において開催した。



谷本真邦事務局次長により開催が宣言され、まず衛藤征士郎前会長より会長・事務総長人事についての経緯説明があった。「このたび私の退任に伴い、長く筆頭副会長を務めていた額賀福志郎先生(現・衆議院議長)に会長をお願いした。中川正春前事務総長の後任としては海江田万里先生(前・衆議院副議長)をお願いすることになった。お二人から了承を得ているが、改めて総会の場で皆さんの承認を得たい。」という内容であった。満場一致で承認された。

額賀福志郎新会長より、20年前の衆議院における世界連邦国会決議の理念を忘れることなく着実に進んでいきたい旨の就任の挨拶があった。また、ここまでの衛藤前会長・中川前事務総長への謝意を表し、第二部でスピーカーを務めるチクヴァイゼ博士への御礼の言葉を述べた。海江田万里新事務総長より、「衛藤征士郎前会長や中川正春前事務総



長が一生懸命やってきた姿を見てきたし、14代国会委員会会長の中野寛成先生からもよろしくと言われていた。先輩方に負けないように額賀会長とともに頑張っていきたい。」との挨拶があった。

続いて来賓挨拶が行われた。中川正春前事務総長は、「今の世界情勢が大変厳しいものになっており、国連改革について日本から具体的な発信をしていくべきである」と述べ、さらに、「ぜひ顧問の一人に加えて、今後も関わらせていただきたい」と積極的な発言をし、了承された。

一般社団法人・世界連邦運動協会の大橋光夫会長からは、「世界連邦運動は世界各地で行われているが、国会に組織を持ち、国会決議もしているのは日本だけである。世界連邦運動協会としても世界連邦日本国会委員会の皆さんと連携して活動していきたい。」という話があった。

総会議事にうつり、まず役員人事について額賀福志郎会長より説明があり、承認された。今回の役員人事の結果、石破茂現総理と麻生太郎元総理が顧問に新しく加わり、以前から顧問になっている岸田文雄氏・菅義偉氏・野田佳彦氏らも合わせ、総理大臣経験者や議長経験者などが大勢名前を連ねる結果となった。また、自民党の森山裕幹事長、公明党の斉藤鉄夫代表、共産党の田村智子委員長が今回副会長に加わることで、以前から副会長に就任していた立憲民主党の福山哲郎元党幹事長、日本維新の会の前原誠司共同代

表、国民民主党の玉木雄一郎代表などと共に、各党の代表・幹部などが副会長に揃い踏みする結果となった。さらに、積極的に出席し、発言した方々にはキャリアにかかわらず常任理事などの役職をお願いすることとなった。

前年度活動報告・今年度活動計画案・前年度収支決算・今年度予算案について塩浜修事務局長より説明があり、全て原案の通り承認された。



第二部では、国連欧州本部事務局長の *Dr. David A. Chikvaidze* (デビッド・チクヴァイゼ) 博士によるスピーチが行われた。チクヴァイゼ博士はジョージア出身の政治学博士。駐アメリカ・ソビエト連邦大使館儀典長、ゴルバチョフ・ソビエト連邦大統領やエリツィン・ロシア連邦大統領の補佐官などを経て、国際連合に入職。以降約 30 年、国連で勤務。国連人権高等弁務官上級顧問、国連図書館長などを経て、国連欧州本部事務局長・官房長官(Chef de Cabinet)などとして、長年にわたり国連の政治顧問を務めている。セルジオ・ヴィエイラ・デ・メロ財団創設者、ジュネーブの外交官クラブ副会長、世界芸術科学アカデミーフェローなども務める。チクヴァイゼ博士はこの会合の後、ソ連崩壊の舞台裏などを記した著作を国立国会図書館に寄贈。同書は米国議会図書館以外に所蔵がなく、世界的にきわめて史料価値が高いものである。

その後、各党を代表して川合孝典常任理事(国民)、石川博崇常任理事(公明)、井上哲士常任理事(共産)、齊藤健一郎常任理事(会派：NHK)、阿部知子常任理事(立憲)からそれぞれ挨拶があった。

外務省総合外交政策局の松尾裕敬審議官からは、衆議院・参議院本会議で行われた世界連邦国会決議の意義を真摯に受け止めている旨の挨拶があった。

グローバルガバナンス推進委員会(世界連邦日本国会委員会の諮問機関)の長谷川祐弘座長より、2005年8月2日に衆議院本会議で行われた世界連邦国会決議をバージョンアップした案が提示された。

その後、福山哲郎副会長・塩村あやか常任理事・羽田次郎参議院議員(以上：立憲) 鈴木宗男副会長・松原仁常任理事(以上：無所属)、福田玄衆議院議員(国民)からも発言があった。「決議には地球環境問題を強く盛り込んでほしい」「アメリカが世界中に関税をかけまくるなど、想定外の動きの中で日本の役割を考える必要がある」などの意見が述べられた。

世界連邦近畿協議会の三宅光夫会長、世界連邦文化教育推進協議会の宍野史生理事長、賀川豊彦記念松沢資料館(賀川氏は世界連邦建設同盟初代副総裁)の杉浦秀典副館長からも発言があり、世界連邦運動が国会内外で協力して運動している様子が示された。また、世界連邦文化教育推進協議会の大会が7月29日に行われることも紹介された。

今回の役員人事でかなり重厚な布陣となった。新しい体制で終戦被爆・国連創設 80 周年の年に更なる飛躍を図りたい。

出席は額賀福志郎会長、海江田万里事務総長の他、以下の通りである(敬称略)。

<議員本人出席> 自民：衆 工藤彰三・穂坂 泰、参 加田裕之、立憲：衆 青山大人・阿部知子・逢坂誠二・川原田英世・柴田勝之・杉村慎治、参 塩村あやか・羽田次郎・福山哲郎、維新：参 梅村みずほ、公明：参 石川博崇、国民：衆 浅野 哲・鳩山紀一郎・福田 玄、参 川合孝典、共産：参 井上哲士・山添 拓、無所属：衆 松原 仁、参：齊藤健一郎・鈴木宗男、元職：衛藤征士郎前会長・中川正春前事務総長  
<秘書による代理出席> 自民：衆 井上信治・菅 義偉・西村康稔、参 猪口邦子・山東昭子、立憲：衆 馬場雄基・道下大樹、参 田島麻衣子・水野素子、維新：参 青島健太、公明：衆 鰐淵洋子、社民：参 福島瑞穂、参政：衆 北野裕子

(塩浜 修)

文部科学省、世界連邦宣言自治体全国協議会後援  
第53回世界連邦推進全国小・中学生ポスター・作文コンクール  
優秀作品展・表彰式

第53回世界連邦推進全国小・中学生ポスター・作文コンクール（文部科学省と世界連邦宣言自治体全国協議会が後援）の表彰式が2月24日、JICA地球ひろばの国際会議場で行われ、入選した児童・生徒、父母や親族など約100名が全国から参加。同じフロアの2階ギャラリースペースでは、優秀作品展が2025年2月11日～2月24日に開催。表彰式の当日は雲一つない晴天で式典にふさわしい日になり、世界連邦21世紀フォーラムのスタッフの協力のもと、朝から準備が進められ、式典の運営も担っていただきました。

表彰式では、大橋光夫会長のご挨拶に続いて、野田武志事務局長より第53回コンクールの実施報告、そして作文・ポスターの両部門の文部科学大臣賞状と副賞（トロフィー）、及び各賞の賞状と副賞（特賞：楯、湯川スミ賞：ブロンズと図書券、入賞：楯、佳作：メダル）が受賞者に授与されました。今回の全国からの応募総数は、ポスター82校860点、作文26校268点でした。



表彰式では、文部科学大臣賞受賞の岩倉優さん（小学5年）、特賞受賞の宗凜太郎さん（中学1年）と朝野桐生さん（中学1年）、以上お三方が作文を朗読、各自の視点で平和や戦争、現社会の多様性について思いを語り、自分たちがどのように行動していけば平和を築くことができるかを力強く語りました。



審査講評は、作文の部の審査員・明石要一先生と、ポスターの部の審査員・廣畑正剛先生から直接いただきました。明石先生は今回初めて審査員を務められ、マイクを握り受賞者のそばまで来て、「すばらしい作品ばかりで胸が熱くなりました。皆さんにはこれからも事実を書くのではなく、自分が感じたこと、自分の思いのたけを文章にしてください。」と語られました。廣畑先生は、表彰式参加の受賞者ごとに講評を述べ、最後に「みなさん、もっともつと心を自由にして、硬くならず何事にも縛られず、自分の中から出たものを自由に描いてください」とエールを送られました。



大橋光夫会長は、式典前にJICA2F展示ギャラリーに展示されている作品を一つ一つじっくりと鑑賞され、「昨年と同様にポスター・作文の両部門の優秀作品からのあふれんばかりのエネルギーと創造性に圧倒されます」と話され、ご挨拶の中で「皆さんは、歴史が長く、日本政府にも認められているこのコンクールで受賞したということに誇りに思ってください。また、この機会にさらに平和のこと、地球環境のことについて勉強を重ね、どうしたら人類同士の殺し合いを止め、世界を平和にし、自然豊かな地球を残すことができるか考え続けてください」と述べられました。

このポスター・作文コンクールの応募テーマは平和や環境問題と世界連邦、あるいはこれらの趣旨にかなうテーマとしていますが、昨年に続き今年もさらに裾野がひろがり、独創性あるテーマやモチーフがたくさん見受けられました。日本のみならずネパール、モンゴルからも応募作品がたくさんあり、世界の皆さんに参加していただけるコンクールにしたいという思いが少しずつつかなってきた感じがします。次代を担う小・中学生の皆さんが人類の一員としての意識を持って世界連邦についての理解を深め、世界平和の実現をともにめざしていただけるように、事務局としてコンクール運営に一層精進していこうと心のなかで誓いました。表彰式に参加いただいた皆さんの輝いた目と誇らしげな笑顔から元気をもらい、これからの未来は明るいと感じられました。

21世紀フォーラムのスタッフの協力もあり、表彰式は無事終了。優秀作品集の作成にあたっては、世界連邦徳島の宮崎太理事、教育広報委員会委員長・税所貴一理事に多大なご尽力をいただきました。今回のコンクールにおいても各加盟団体、関連団体の皆さまのご協力なくしては成り立ちませんでした。ご尽力に感謝いたします。次回も多くの応募者があるように、また表彰式で受賞者の皆さんの誇らしげな笑顔に出会いたいと願っております。

(川口 美貴)

### 【作文審査講評】

#### 明石要一先生



素晴らしい作品が多く寄せられ、戦争と平和の問題を正面から浮き彫りにしているものから、スポーツや話し合いと多岐にわたっており、すそ野の広がりを感じます。このような胸に響く作品を

寄せてくれたみなさんに敬意を示したいと思えます。

小学生の作品は少ないけれど、「質」の高さを感じるものがありました。将来が楽しみです。これからも期待できます。

文科大臣賞の寺倉優さんの作品は名高い「杉原千畝」の事例を引用しながら、今日的にありうる問題提起をしています。吉野權さんは、戦争の体験を伝える難しさを「祖父の手紙」という形で紹介しています。朝野桐生さんは、平和の大切さを訴え続けている世界連邦運動の原点をうまく紹介し、あきらめない平和の持続性を訴えています。宗凜太郎さんは、戦争を多様性の視点から論じ、お互いの良さを認め合う中から戦争の火種を消すことができると訴えています。伊藤汐利さんは、「世界は一つ」という言葉を表面的に捉えるのではなく、共有する課題や未来への責任を含むものと訴えています。

その他、入賞、佳作の作品にもすぐれた作品が多くあります。これらの作品が多くの人々の目に触れることを期待します。

#### 立花典子先生



2024年には、パリオリンピックが開催されました。これまでのオリンピックイヤーの作文は、オリンピックで目にした感動を世界平和に結び付けようと、明るく訴える作文が多かった印象があります。

しかし今回は、同じ時期に別の場所では戦争や紛争がいまだ収まる気配がなく、悲惨な状況が続いているという世界情勢を反映してか、オリンピックを話題にした作文が少なく、圧倒的に戦争と平和をテーマにした作文が多かったことが印象的でした。いかに、皆さんの関心が戦争や紛争の終結にあるかがよく伝わってきました。

とは言え、内容はとてもバラエティーに富んでいました。今回の受賞作文は、平和について考えるきっかけとなる出来事が実に様々でした。その出来事が丁寧に書かれているので、そこから生まれた考えや意見には、とても説得力がありました。文章そのものもよく推敲されていて読みやすく、言葉の一つひとつが輝いていました。

今回のコンクールの話題に取り上げるには間に合いませんでしたが、68年間にわたり核兵器廃絶を世界に訴え続けてきた日本被団協(日本原水爆被害者団体協議会)がノーベル平和賞を受賞しました。平和賞は50年ぶりの受賞です。きっと皆さんも大きな関心を持ってこのニュースを聞いたことでしょう。世界中の人々が核兵器について改めて深く考えるきっかけとなることを、皆さんと一緒に願いたいと思います。

## 【ポスター審査講評】

### 廣畑正剛先生



今年は“ポスター”ということに重点をおいて、まわりから見たときにどういうインパクトを見た人が受けるかということのを頭にいれて審査をしました。

例年よく見受けられるパターン化されたものは非常に減り、各作品にはコラージュをしたり、はり絵をしたりなど、とても凝ったものが目立ち、色の強さやインパクトが見る人に与える強さが今回の作品には多くありました。したがって、パッと見たときにポスターの役割として充分にそういう力を発揮しているかということに注目して審査しました。もちろん、いままでと同じように「人類みんな仲良し」というような作品もありますが、昨年、一昨年と違った感じの作品が多く見受けられたのです。また、海外の人の作品にも非常にユニークな、日本人とは少し違う感性のようなものに触れることができました。

### 一の瀬洋先生



私が審査に携わって今回で6年目になりました。最初の頃は画一的なポスター作品が多かった印象があるのですが、だんだん個性的なものが増え、6年目ともなりますと、それぞれの人の感覚と言いますか、他人の神経で

はなくて自分の神経で作品をつくっていくというのが色濃く見受けられるようになったのです。その点、大変よかったと思います。

入選作品をはじめ受賞作品もそれぞれ良いところも、もう少し工夫できるかなと思うところもあり、これがやはり大事です。良いところばかりではなく、良くないところもあるという、そういう欠点があることが、私たちにはとても親しみを感じるころが大いにありました。今年の審査会でも大変充実した審査をさせていただき、ありがとうございました。来年もこの調子で一人一人の言葉で普段考えたことをポスターに表現してください。

## 〔作文の部〕

### 文部科学大臣賞 『杉原千畝が教えてくれたこと』

海津市立今尾小学校五年 寺倉 優

今年の夏の友の裏表紙は、「杉原千畝記念館」。そこには、第二次世界大戦のころ、ナチス・ドイツから六千人ものユダヤ人の命を救った岐阜県出身の外交官がいたということが書かれていた。

杉原千畝だ。

ぼくは、もっと詳しく調べたくなくて、記念館へ行った。そして、主に二つのことを学ぶことができた。

一つ目は、戦争の恐ろしさだ。

人の手によってうばわれた六百万人の命。記念館には、「ホロコースト」という名前で説明があった。展示されているたくさんの写真を見て、とても恐ろしかった。殺された人が、まるで物のように積み重ねていたのだ。ガス室へ入れられたり、銃でうたれたりした罪のない人たち。どうして、こんなざんこくなことができるのだろう。戦争は、人の心をこんなにもくるわせてしまうのだと改めて感じた。

二つ目は、杉原千畝の正義の心だ。

彼は、「命のビザ」をユダヤ人に発給して命を救ったのだそうだ。ナチス・ドイツの迫害から逃れるため、どうしても日本のビザが必要だったユダヤ人。しかし、日本の外務省はその発給を認めてくれなかった。

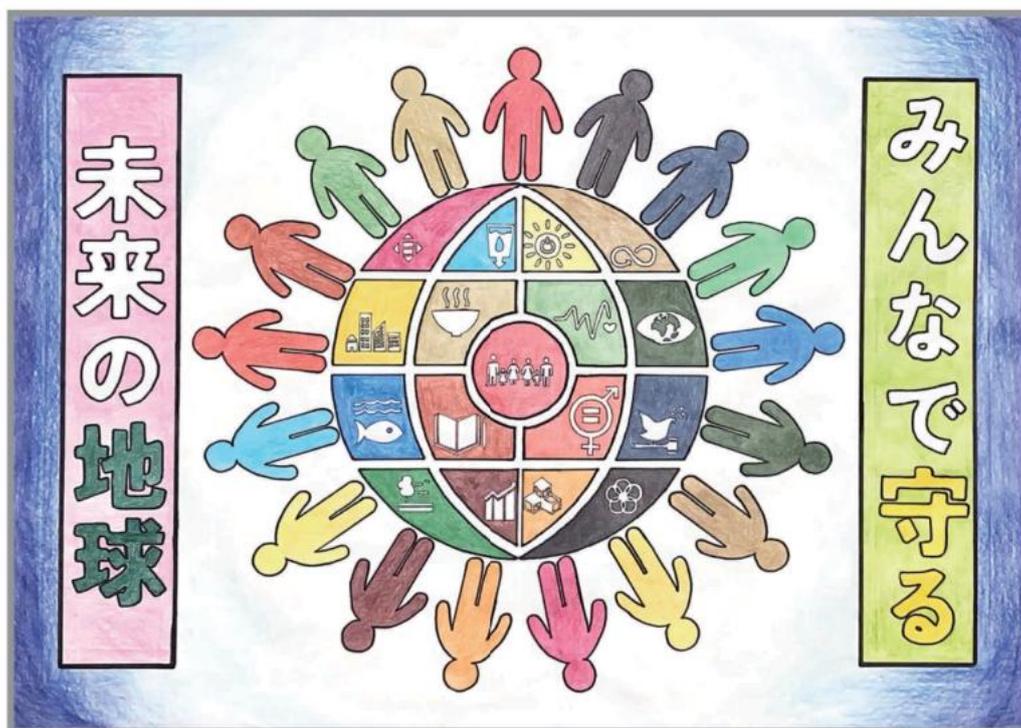
そんな中、杉原千畝は決断しなければならなかったのだ。もし、外務省の指示に従わなかったら、自分は仕事を辞めなければならない。それどころか、そんなことをしたら家族もこの先どうなってしまうか分からない。

記念館では、杉原千畝がビザを書き続けた「決断の部屋」があった。ぼくはその部屋にあった椅子に座って、自分だったらどうしたかをじっくりと考えた。

ぼくは、杉原千畝のことを調べて、戦争の恐ろしさについて知り、正義をつらぬき通すことの大切さを学んだ。ぼくが住む岐阜県に、こんな勇気のある人がいたことは、とてもほこらしい。ぼくも困っている人がいたら、その人の立場になって考えることのできる温かく強い人になりたいと思った。

\*編集方針により、原文の一部を修正しました。

[ポスターの部]  
文部科学大臣賞 『みんなで守る未来の地球』  
門真市立第二中学校二年 乾 早苗



核兵器禁止条約第3回締約国会議閉幕

### 2026年、核軍縮の分岐点

核兵器禁止条約(TPNW)は、条約発効から5年後(以降6年ごと)に、「条約の運用および目的の達成状況を検討するための会議」(再検討会議)を開催することを定めています(第8条)。2026年11月30日から12月4日に、南アフリカを議長国としてニューヨークで開催されることが決定しており、今回の会議は、その再検討会議に向けた最後の協議の場となりました。条約の前進に向けた国際的な機運を醸成し、次のステップへの準備を整えるという重要な役割を果たしたといえます。

さらに2026年は、核兵器をめぐる国際環境にとって重要な年となります。同年春には核不拡散条約(NPT)再検討会議が予定されている一方で、同年2月には米ロ間で唯一存続している核軍備管理・軍縮条約である「新START」が失効を迎えます。核軍縮をめぐる国際情勢がさらに不安定化することが懸念され、NPT再検討会議での合意が再び決裂する可能性も指摘されています。こうした不確実な状況を前に、TPNW締約国とそれを支える市民社会が「ゲーム・チェンジャー」としてどのように条約の普遍化を推進し、議論をリードしていくかが問われています。

### 核抑止論への挑戦と科学的アプローチ

今後の戦略として明確になったのは、TPNW締約国が科学的知見に裏打ちされた議論を展開し、核抑止論に正面から挑む姿勢を強めていく方向性です。採択された政治宣言では、「高まるグローバルな不安定性の中で、核兵器のない世界へのコミットメントを強化する」と明記されており、これは締約国の強い決意を示すものです。

特に注目されるのは、オーストリアが主導する「安全保障上の懸念」協議プロセスと、科学諮問グループ(SAG)の報告書です。これらは今後のTPNW議論を支える柱となり、SAGについては会議間での協議プロセスを開始することが決定されました。この取り組みにより、核兵器のリスクに関する科学的根拠に基づく議論が深まることが期待されます。

一方で、核抑止依存国との溝がさらに深まる可能性も指摘されています。しかし、だからこそ対話の場を確保し、真の意味での「橋渡し」を実現する努力が求められます。特に、昨年の国連総会で設置が決まった「核戦争の影響に関する独立科学パネル」との協力関係を強化することが、重要な足掛かりとなるでしょう。

### 再検討会議までに進めるべき課題と行動

今回の会議では、再検討会議までの会期間に実施される非公式作業部会の継続が決定されました。特に、被害者援助・環境修復の実施に向けた国際信託基金の設立に関しては、2026年の再検討会議での正式な立ち上げを目指しています。技術的な規定に関する報告書を、共同議長が再検討会議の4か月前までに提出することが明記されました。

また、被害者援助・環境修復に関する国連総会決議に賛成したTPNW非締約国の役割も注目されています。日本を含むこれらの国々がどのように関与し、取り組みを支援していくかが、今後の重要な焦点となるでしょう。

### 広がる市民社会の役割と影響力

今回の会議には56の締約国、31のオブザーバー国が参加し、過去2回の会議とほぼ同規模となりました。一方、「核の傘」国のオブザーバー参加はオーストラリアのみで、前回参加していたベルギー、ドイツ、ノルウェー（いずれもNATO加盟国）は参加を見送りました。

一方で、市民社会の存在感はますます高まっています。第1回会議には85団体、第2回には122団体が参加し、今回は163団体が登録しました。この増加傾向は、TPNWプロセスが若い世代にとっても重要な活動の場となっていることを示しています。ネットワークの拡大や経験の蓄積が進み、市民社会全体の底上げにつながっています。

こうした流れを「内輪の盛り上がり」にとどめず、より広範な社会への波及効果を持たせることが、今後の課題となります。特に、若い世代への働きかけやメディア戦略を通じて、核廃絶に向けた機運を高めていくことが求められるでしょう。

### 2026年に向けて

2026年は、TPNWと核軍縮をめぐる国際環境にとって重要な分岐点となります。核兵器禁止条約が「核抑止論」への正面からの挑戦として確立されるのか、それとも核保有国との対話が停滞してしまうのか。今後の成否は、条約締約国と市民社会がどれだけ効果的に戦略を練り、対話を促進できるかにかかっています。

再検討会議に向けての準備が本格化する中で、私たち市民社会も役割を果たし、核兵器廃絶に向けた道筋をともに築いていきましょう。

(野田 武志)

## ジュネーブ国際機関を訪問



私は、世界連邦青年会議(ユースフォーラム)の学生代表をつとめている大学院生で、2025年の春休みを利用し、約1か月にわたり欧州や中東を旅行している。このなかで、国際連合欧州本部といわれているスイス・ジュネーブにある国際諸機関を7日間にわたって訪問した。

この訪問旅行をするに至った切っ掛けは、スイスのボーディングスクールを卒業していたので、ジュネーブの国際機関に親しみがあり、より一層知識を深めたいと考えていたからである。国際機関で働くことを志望する日本人が実際に国際機関を訪れ、そこで従事する職員に直接キャリアや職務についての実情を聞き、その後のキャリア構築の検討材料にするという企画は、まさに私の考えにふさわしいものであり、これに参加することにした。



この企画は、今回で11回目。学生・社会人の如何を問わず、例年、10数名規模の国際機関志望の日本人の若者を中心に参加者が集められて実施されている。本年は社会人7名、学生11名、合計18名での開催となった。

今回、ジュネーブに事務所を構える15の機関を回った。WHOやUNHCRなどの国連機関をはじめ、日本政府代表部、Global Fundなども訪問した。

各所において職員の方と参加者は、国際機関でのキャリア構築に加え、現在の国際情勢の中で各機関の活動がいかに変容していくのかについての会合を持った。その会合では活発な質疑応答もされ、現場の肌感覚を得ることができたので、キャリア面と国際機関の現状について、参加した所感を手短かに記すことにする。

まず国際機関でのキャリア構築については、自身の専門性を磨くことの重要性を再認識した。巷では、興味のあるテーマを軸に、国際機関での従事を夢見る若者が多い。一方で、実際に国際機関で働く際には、自分の興味や関心でポストを選ぶ余地はあまりない。実際には、応募できるポストには全て応募し、通ったところで働く、という方が多いそうだ。こういう現状のなかで、自分の関心ある分野で仕事をするためには、自分自身が相当高度な専門能力を有するしかない。私自身も、キャリアパスについて、あらためて考えなおす必要を痛感した。

次に、昨今の国際機関の現状は、やはりマルチ・ラテラリズムの後退が顕著に表れていた。実際の現場からは、苦勞と疲弊の声が多く聞かれた。また国際情勢の潮流の影響で、規模が縮小される分野の機関もあり、職員を減らしているところも散見された。

世界連邦運動は、国際連合を中心とした国際機関の改革と強化である。にもかかわらず国際機関がこのように後退しているのは残念だ。そこで今回の経験を参考に、より一層、若者たちに運動の啓発をしていきたい。

(池上 慶徳)

## 世界連邦関係各団体の動き

- ・3月7日 世界連邦運動協会理事会
- ・3月12日 世界連邦・平和を考えるフォーラム学習会 (オンライン)
- ・4月24日 世界連邦・平和を考えるフォーラム学習会 (オンライン)

### 編集後記

☆台湾の金門島に行く機会にめぐまれました。島から中国大陸をながめ台湾、中国の平和と安定を願いました。(川口) ☆昨年の総選挙で議席を失った先生が15名、出馬せずご勇退された先生が5名、一方その後新しく入会された先生が16名という現状である。引き続き勧誘し、会員を増やしたい。(塩浜)  
 ☆世界連邦運動の主流は、国連や国連憲章をはじめとする様々な国際法や国際機関を尊重しながら、それらの改革を進めることによって世界平和の維持や実現を目指している。しかしながら、国連設立の中心国であったアメリカ合衆国において、現在、トランプ大統領が国際法や国際機関を軽視し、世界を翻弄している。このように世界連邦の実現に逆行する世界情勢だからこそ、世界連邦運動はその真価を発揮しなければいけない。アインシュタインは「第三次世界大戦が起きれば文明の崩壊は免れることはできない」という意味に解される警笛を鳴らし、第34代アメリカ大統領のアイゼンハワーは「第三次世界大戦に勝つ唯一の方法は、第三次世界大戦を防ぐことだ」と述べている。(平口)

## あなたも世界連邦運動協会の会員になって一緒に活動してみませんか

入会希望の方は、郵送かFAXまたはEメールにて、住所・氏名・電話番号・メールアドレスを本部事務局へお知らせください。またEメールでお申し込みの場合は、件名に「入会申し込み」と明記してお送りください。

普通会員年額5,000円 維持会員年額10,000円 賛助会員年額15,000円



世界連邦運動協会 本部事務局

〒105-0003 東京都港区西新橋2-15-17 リッツ虎ノ門4F-BC

電話 (03) 6438-9442 FAX (03) 6438-9443

E-mail info@wfmjapan.org